



5

道祖神どうそじんの前を通り過ぎようとした実方は  
急に暴れだした馬から落ち  
大ケガをしてしまいました。



6

そのケガがもとで治療ちりょうの甲斐かい無く  
いよいよ息をひきとろうと言う時、  
実方は枕元かしんに家臣かしんを呼びました。  
「私が死んだら、歌枕うたまくらにも詠よまれるほど美しい  
と言われている出羽でわの国くに(いまの山形やまがた)の千歳ちとせ  
山やまに埋葬まいそうして欲しい。」  
と、言い残し亡くなってしまいました。



7

その知らせは家臣によって  
京の都の妻と娘の元へ伝えられました。

娘の「あこや」は、父の死を  
たいそう嘆き悲しみました。

そして、父の墓参りはかまいのために  
落馬した名取の地を通って  
千歳山に向かうため旅立ちました。

あこやは千歳山までの長い道のりを  
何日も何日もかけ歩きました。



8

道中、途中の集落の庵いおりで休みながら  
千歳山を目指し、  
時折、笛ふえを吹いて過ごしていました。  
あこやは京の都でも横笛の名手で  
その笛の音は、たいそう美しく  
山や川岸まで流れるように  
響き渡りました。